



「旅立ちの地」エッセイコンテスト

入賞

新たな自分に逢うために

柳澤 有香 東京都

大学を卒業して数年、私はごく普通の会社員として生活を送っていた。文系出身の私は営業職に就いたが技術があるわけでもなく、毎日多忙なスケジュールに対応するだけで充実感を得ていた。これがやりがいなのだ。いつもどこかに感じる違和感を忙しさと誤魔化しながら毎日を過ごしていた。

安定した収入とそれなりの仕事、悪くない職場環境。それでも「これでいいのか？」という疑問が湧き上がってきた。表向きは恵まれているように見える私の生活だが、もはや自己詐瞞はできなくなった。

一方で、友人の麻理は、理系の大学院を卒業した。建築家を目指してインターン生活を経て、建築事務所に就職した。簿給の上、奨学金の返済や、締め切りに追われ、疲労の色を隠すことは難しかった。プライベートな時間はほとんどないのに関わらず、それでも彼女は輝いて見えた。麻理の

生き方には明確な目標と夢があり、それに向かって全力で進んでいる姿があった。それに対して、私は自分が何者かすらわからず、日々の業務に追われるだけの生活だった。

飲みに行った時、麻理は新しいプロジェクトについて熱心に語っていた。自分が設計に携わった建物が建つのだと興奮していたが私は内心で葛藤していた。私は麻理に真剣な眼差しで尋ねた。

「麻理は、本当に今の生活で満足しているの？」
「もちろん。夢を追うのには犠牲がつきものだからね」

彼女の言葉に、私はハッとしました。私の質問は麻理への問いかけではなく、自分自身に問いかけているのだと気づいた。彼女の答えは私の心の奥深くに刺さった。私は何か犠牲を払ったことがあるのか？その夜、自分の人生について真剣に考えた。このまま安定を選び続けたら、本当に幸せになれるのか？それとも、未知の未来に一步踏み出す勇氣を持つべきなのか？しかし、本当にやりたいことは何なのかすらわからなかった。

そんな時、鹿児島島に行く機会があった。鹿児島島の美しい自然と歴史に触れる中で薩摩藩遺英使節団の展示を目にした。歴史の教科書で触れた程度だったが、鎖国の時代に、遣英使節団が密航留学生として命をかけて海を渡り、異国の地で未知の世界に飛び込んだ姿が描かれていた。言葉や文化の違いはもちろんのこと、情報伝達がない時代に海を超えた彼らには多くの困難が降りかかったは

ずだ。慣れない異国で精神バランスを崩した者もいたが、それでも彼らは乗り越え、日本と西洋の架け橋となるために尽力し現在の日本の経済の基盤をつくった。外国に視察に行き、日本の技術や教育を向上させようとする若者の姿に心を惹かれた。彼らはまた安定を捨て、高い志を持ち新しい世界に飛び込む勇氣を持っていた。

私が必要としていたのは、安定した生活ではなく、自分自身の信念と夢を追いかける勇氣だと気が付かされた。

私は、仕事を辞めて、見えない未来へ向かって一步踏み出すことにした。見知らぬ自分に会うために。何が待っているかは全く予測不能だがそれも楽しみ受け入れようと覚悟した。まずは自分の信念と自信を持って進むことが大切だと感じた。子供の頃に夢見た、芸術の道に進もうと西欧に行くことにした。

未来は見えないからこそワクワクする。もし三年後の未来が見えたら、それは本当に幸せなのか。きつと、それぞれの人が違う答えを持っているはずだ。何が起こるかはどうでもいい。その時考えればいい。

もし、私がこの決断を後悔することがあってもそれもまた私の人生の一部として受け入れる覚悟はある。

薩摩藩遺英使節団のように、私も新しい世界に向かって港を旅立ち船を進めることにした。